



発行所  
 社団法人 国民文化研究会  
 (九州←→東京←→全国)  
 東京都渋谷区東1-13-1-402  
 振替 00170-1-60507  
 電話 03-5468-6230  
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部  
 毎月一回10日発行  
 購読料 年間2000円

# 「天皇は聴く」

## クローデルの天皇観

小柳 志乃夫

会社経営の傍ら、社会・教育活動に熱心に取り組んでゐる後輩に、「会社の方は大丈夫なのか」と尋ねると、「会社の経営は社員の声がよく聴けてゐれば大丈夫だと思つてゐます」といふ答へが返つてきた。えらいと思つた。人の話をよく聴くには一種の修練を要するやうに自分は思ふ。

「聴く」といふと思ひ出すのが、昔友人と学んだ「天皇は聴く」といふポール・クローデルの言葉である。大正期の駐日フランス大使で、詩人でもあつたクローデルは、天皇について「天皇は帝国を統治しない。天皇は聴く」といふ定義を下した(平川祐弘「クローデルの天皇観」)。

遠く古事記では、国を治めるといふことについて「うしはく(領く)と」「しらす(知らす)の二つの言葉

が遣ひ分られてゐる。前者は土地人民の領有支配を意味し、後者は天皇統治のさまを示す言葉として用ひられた。クローデルはこの「しらす」といふ天皇統治のありやうを詩人の直観で見事につかみ、「天皇は聴く」と端的に表現したのである。「うしはく」といふ支配者と被支配者が対立する権力闘争的な世界に対し、相手の話をよく聴き、心を一つにしてゆかうとつとめる「しらす」の世界。その間の落差は大きい。

北朝鮮の専制や中国のチベット支配など、地球上「うしはく」国は数多くの危害が及んでゐる。かかる勢力に対する米國についても、先日の大統領選挙の様子でも明らかな通り、自らの言説を誇示し聴くよりもまつ主張が先にあ

りきの國がらである。

先ごろ、七十歳を迎へられた皇后陛下が記者団の質問に対して寄せられたご回答の中に、「自らが深い悲しみや苦しみを経験し、むしろそのゆえに、弱く、悲しむ人々の傍らに終生よりそつた何人かの人々を知る機会を持つたことは、私がその後の人生を生きる上での、指針の一つとなつたと思ひます」といふ感銘深いお言葉があつた(宮内庁ホームページ)。考へてみれば、古来から「弱く、悲しむ人々の傍らに終生よりそふ」ごとく国民とともに歩んできて下さつたのが、他ならぬ歴代の天皇方であつた。

此度の新潟県中越地震でも、天皇・皇后両陛下は現地に行幸啓なさつて、被災者を慰められた。避難場所の体育館で膝を接して被災者の言葉にお耳を傾けられた。あまりに恐れ多いと思つたが、被災者の方々がどれだけの力を与へられたかと思ふとまことにありがたいことである。テレビを通してではあるが、被災者の方々の顔や声にかつてない光がさしてゐるのがあきらかに感じられた。「しらす」といふ天皇統治の伝統は正しく今も生きてゐるのである。

クローデルは、「明治」といふ文章に、明治神宮に祀られた先帝明治天皇

と神前に詣でる国民の無言の対話の様子をかう記してゐる。「天皇はそこにいて皆の話を聴く、皆はそれぞれそこへ来て一身上のことを話すことができ。自分の苦衷を述べに来ることもできる。…外交官や軍人が重要な任務を果して帰国した時、かれらは明治神宮に参拝して報告する。また感謝の礼を述べに来るのも、ここである」と(園点筆者)。

「天皇は聴く」とはここに死者と生者との対話を示し、やがて祭政一致の伝統につながっていくといへよう。平川祐弘教授は「クローデルはなにかコートピアを書いてゐるよさうな気もする」としつつも「しかしまたひるがえつて考えると、重大な使命を國民から託された大臣や外交官が代々木の神宮に参拝しないような日本に将来もしなるのなら、それも淋しいではないか」と記されてゐる。これは昭和四十九年の文章なのだが、教授のいふ「将来」は既に随分前に到来したかのやうに思はれる。

願はくは、今日のわが國の政治家に、クローデルが注目し、三十年前の政治指導者には身近に生きてゐた、この天皇統治の伝統に深く思ひを致してほしいものである。

(みずほコーポレート銀行勤務)